

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2011年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	研究科 現代心理学	専攻 臨床心理学
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	現代心理学研究科臨床心理学専攻 博士前期課程 2年	岩崎 草千子 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	教授	箕口 雅博 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 社会	個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
研究課題名	コミュニティ心理学の視点で見た外国人女性へのソーシャルサポートの実態とニーズ		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	現代心理学研究科臨床心理学専攻 博士前期課程 2年	岩崎 草千子	
研究期間	2011	年度	
研究経費	184,997	円	

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

ニューカマー女性たちの、ソーシャルサポートの実態とニーズ、異文化ストレスの実態を把握するため、子育て中の3人の来日10年以内のニューカマー女性に半構造化面接を行った。その内容を質的に分析した。その結果、3人中2人が危機状態と言える状況を経験し、また3人全員が日常生活の中で困った経験していた。そのような場合、3人ともが自らさまざまなソーシャルサポートにつながることで、その状況を克服してきた経緯が分かった。また、そのような困難な状況に陥った背景に、日本という国を移住先として選択したことへの消極性や準備の不足などがあると考えられた。また、現在あるいは過去に積極的に日本語学習に取り組むことで、サポートネットワークとのつながりを形成したり、日常生活の向上が図られていることも伺えた。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[コミュニティ心理学] [外国人(ニューカマー)女性] [ソーシャルサポート]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

<研究の方法>

● 依頼と実施 (研究機関終了後も継続予定)

2011年9月下旬から～10月下旬にかけて、首都圏の各地域で外国人の生活支援や日本語学習支援を行っているD市とE区の合計3つの団体・グループ等の運営者やキーパーソンとなる方々に紹介して下さったニューカマー女性に面接調査を依頼した。また、筆者自身の日本語学習支援のボランティア活動を通じて知り合った方にも依頼した。依頼の方法は、口頭及び書面で面接調査の目的をお伝えし、調査協力への意志を確認した上で面接調査を行った。その際調査協力者には、「インタビュー調査へのご協力のお願い」は各協力者の母語に翻訳されたものと日本語版(振り仮名入り)を渡した。インタビュー調査実施時は、各協力者の母語での会話を可能とするため該当する言語と日本語の通訳者にも同席していただいた。インタビュー時間は90分～110分であった。

● 対象者

面接調査実施当時この10年以内に成人後来日しその後日本で生活し今のところ今後も定住する予定の、18歳未満のお子さんを養育している3人のニューカマー女性で、出身国はそれぞれ、南米圏、韓国、中国であった。

● 質問項目

事前に以下のような質問項目を準備し、全ての質問をする必要はないという前提で、インタビュー協力者の話の流れを妨げないように質問項目を順次入れ替えながら聞いた。

1. 「属性」

年齢、出身国(国籍も)、来日前後の家族構成、来日前後の職業、
来日時期、来日理由・動機(来日を言い出した人も)、現在のお住まい、日本語習得度

2. 「困りごととその対処」

3. 「良かったこと・嬉しかったこと」

4. 「日本人とのつきあい、同郷の方や他の外国人とのつきあい、母国との交流」

5. 「母国の夢は見るか」

● GHQ12の実施

半構造化面接を行う前に、「GHQ 精神健康調査票 12 項目版 (General Health Questionnaire12)」を実施し、精神健康度の指標とした。

● 面接終了後

また、面接終了後には、調査協力者の生活に少しでも役立つ情報を提供するという趣旨で、調査協力者の居住する市町村区で多文化共生社会の実現を目指し外国人支援活動を行う国際交流協会や特定非営利法人に関連する情報を収集し、とりまとめたものを提供した。具体的内容としては、それらのセンターへのアクセス、外国語相談や専門家相談の実施スケジュール、災害時の対応(防災のための知識・避難場所)、健康診断のお知らせ、就職支援、地域の外国人支援のボランティア団体などの情報、そしてニューズレターであり、いずれも多言語でホームページなどに公開されているものである。また、Aにはスペイン語での精神科治療を行っている都内のクリニックに関する情報も提供した。

● 分析方法

分析資料となるデータは2段階を経て作成した。第1段階は、予め同意を得てICレコーダーで録音した面接調査内容を基に逐語録を作成した。第2段階において、面接調査中に調査協力者が母国語で発話した箇所に関して、調査終了後に通訳者に再度内容を確認し、必要に応じて再度訳出していただいた。その際、特に留意した点は、①調査協力者が比較的長時間連続して語ったため通訳者がその場で十分に訳出できなかった可能性の高い箇所の見直し、②通訳者が伝聞形で筆者に伝えた箇所を調査協力者が語っている口調や言い淀みにも注意した再訳出、③言語の違いにより日本語での直訳では伝わらない内容の確認と補足、④文化的社会的背景の違いによる注意点の確認と補足、の4点である。これら2段階の作業を経て作成したデータを分析資料とした。

研究成果の概要 つづき

<結果>

3 件のインタビュー調査の結果、3 人中 2 人が危機状態（日本人の夫からのドメスティック・バイオレンスを受けた経験、性別役割のはっきりしている家庭で異文化ストレスと子育てのストレスから来たと思われるうつ状態）と言える状況を経験し、また 3 人全員が日常生活の中で困った経験（買い物場面やアパートでのトラブルなど主に日本語がわからないことによるもの）していた。そのような場合、3 人ともが自らさまざまなソーシャルサポート（エスニック・グループのキーマン、市役所、外国人支援団体、支援者、母国の家族・友人）につながることで、その状況を克服してきた経緯が分かった。また、そのような困難な状況に陥った背景に、日本という国を移住先として選択したことへの消極性（難民状態での来日、夫の仕事）や準備の不足などがあると考えられた。また、現在あるいは過去に、自学自習や日本語学習支援団体が開催する日本語教室などで積極的に日本語学習に取り組むことで、さらなるサポートネットワークとのつながりを形成したり、日常生活の向上が図られていることも伺えた。

また、母国の夢を見るかという質問に対しては、3 人の方がそれぞれ「時々、若い頃に家族などと旅行した時の夢を見る」、「以前は不安なときに子どもの頃の思い出の場所や家族の夢をよく見ていたが、現在は日本人が出てきて日本語で話す夢を見ている」、「夢は全部中国語で結婚する前の時代や子どもの頃、家族の夢を見る」という内容の回答で、それぞれが母国の夢を見ている（た）ことも分かった。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)